"Karuṇāpuṇḍarīka" の阿彌陀佛因願文について

宇治谷祐顯

一　梵本

"Karuṇāpuṇḍarīka" は、一般に悲華經十卷（北凉、道龔譯―失譯。北凉、曇無讖譯―AD 419）と大乘悲分陀利經八卷（秦時AD 384～417 譯者不明）として漢譯せられているところのその梵本であつて、其には "Karuṇāpuṇḍarīka nāma mahāyānasūtra" である。いま玆に私が主として依用するところの梵本は、一八九八年、çarat chandra dās と çarat chandra çāstri によつて、印度、カルカッタに於いて公刊された所謂カルカッタ本（以下C本と稱する）であるが、このほかに同寫本として傳えられるパリー國立圖書館本（Bibliotheque national, paris photog, by Dt, Suzuki 大谷大學圖書館藏―以下P本と稱する）と、京都大學所藏（以下K本と稱する）の二寫本を比較參照することとする。

この梵本は第一品 Dharmacakrapravarttana（轉法輪品）、第二品 Dhāraṇimukha（陀羅尼品）、第三品 Dānavisarga（大施品）、第四品 Vyākaraṇa（授記品）、第五品 Dāna（檀波羅密品）の五品に分けられているが、また問題とする阿彌陀佛の因願は、その第四品 Vyākaraṇa の初に掲げられている。

二　課題の所在

さて、この因願文については一般に漢譯本からして、無量壽經所說中の阿彌陀佛四十八願と對同し、既に二、三の識者に依つて彼此比較討究が試みられているが、まづ第一に斯經所說の因願に於いて問題となるのは、その願事の內容とそれに關聯する願事數である。それは「壽經」所說の因願は梵、藏、漢共に願事が一定の言詞によつて區劃せられているので、その願事の數、及び內容についてもこれを容易に理解し得られるが、いま悲華經に於いては梵、藏、漢共に願事間に一定の區劃がなく、概して言えば一聯の散文體[1]に書き綴つてあることである。

そこで Karuṇāpuṇḍarīka（C本）の因願文を現存二寫本に照合して整理按配し、まず梵文の校訂が施されねばならない。そうすることに於いて、そこにかなり願事の判別が行われ、現存二漢譯及びそれに依る二、三先輩の研究成果に對して若干の異同、差異が見出し得られて、所謂悲華經の阿彌陀佛因願の當相を把握し得ることが出來ると思う。

第二の課題は、こうして得られた悲華經の因願と壽經 Sukhāvatīvyūha のそれとの對比である。そこに悲華經因願の特性が見出され、その特性から類推する本經成立上の一面的解答が與えられることである。

三　梵文悲華經の因願（和譯及校訂）

斯經に於いて無量壽佛は如何なる體裁を以て、如何なる願事を誓約したか、願事は總じて幾願であつたか。上述する如く、そこには一定の句切がなく、散文體に書き連ねてあるから、この點明瞭を缺く。これについて、望月博士（淨土教の起原及び發達）、加藤智學師（無量壽經と悲華經の對照—無盡燈二四、十一號）は壽經になぞらえて、一應四十八願に、また西尾京雄師（國譯一切經、經集部五）は五十一願に分類せられている。それでは現存梵本は如何に區劃せらるべきか、總じて悲華經所說の誓願は「壽經」のそれとは若干趣を異にし、梵、藏、漢三者共に大體に於いて攝淨土の諸願と攝法身（自德と衆生化益）の諸願との二郡に羅列的に分劃して說き出されている。このことは「壽經」所說の因願を基調とし、それに改修增補が試みられた阿彌陀佛因願の向上發展を物語るものであろうとも思われるが、このところ現存梵本は次の如き表現に於いて、區劃表示がなされている。

A imāni ca bhagavan mayā saptavarṣāni buddhekṣetra-guṇavyūhācintitāḥ / yatrāham bhagavan buddhakṣetre anuttarāṁ samyksambodhimabhisambuddhe (tatra……/……/……/……)

〔而して、世尊よ、われによりこの七年間、佛國の功德莊嚴が思惟せられたり。世尊よ、われはそこなる佛國に於いて無上正等覺を證得せん（そのところには……/……/……/……）〕以上攝淨土願

B evamrūpeṇāhaṁ bhagavan buddhakṣetreṇārthī / tāvadahaṁ bhadanta bhagavan bodhisattvaduṣkaracaryāṁ cariṣye yāvannevaṁrūpairguṇairbuddhakṣetraṁ pariçodhayiṣye / evamahaṁ (bhadanta) bhagavan paruṣakāraṁ kariṣye / tataḥ paçcādanuttarāṁ samyksambodhimabhisambhotsye / (……me……/……mama……/……)

〔世尊よ、わが希ふところの佛國はかくの如し、大德世尊よ、われはかくの如き功德を以て佛國を淸淨ならしむるまでは、菩薩難作の行を行ずべし。大德、世尊よ、かくの如くわれは難行を修し、しかる後に無上正等覺を得ん。（……そのわれにとつては……/……/……）以上攝法身願

そこで、いまこの願文二大分劃の表現句とそれに續いて說き出される因願事の文體とを仔細に檢すると、大體に於いて次の如き標識が見出し得られる。

A yatra〜tatra ; sarve tatra sattvās ; (tatra) sarvasatvās の關係（前半攝淨土願）

例 ○ *tatra* na nirayāsyurṇatiryagyonir na yamalokāḥ ye ca sattvāṁçcyāvayeyuste mādurgatāvupapadyeyuḥ / ○ *sarve tatra sattvāḥ* suvarṇavarṇā bhaveyuḥ /

則ち、「そこなる佛國に於ける……そのところに於いては云々」の關係である。

B *ahaṁ*……samyaksambodhimabhisaṁbhotsye〜*me* / *mama* ; bodhiprāptasya *mama*

の關係（後半、攝法身願）

例 ○ Daçayojanasahasraçca *me* bodhivṛikṣo bhavet……/ ○ apramāṇaṁ ca *me* prabhāsyāt……/

則ち、「正覺を得るであろう……そのわれにとつては云々」の關係である。

そこで、いま右記に依る文章構成上の標識[2]を目當とし、テキストの指示する區切線を白紙に還元して、殊更文意文勢上の過誤に陷らない程度に區劃分譯を試みると次下の如くである。（但し和譯並に校訂梵文[3]は餘白の關係により割愛し別の機會に報告する）

1、無三惡趣不墮惡趣、2、悉皆金色、3、人天無異、4、悉知宿命、5、天眼見佛、6、天耳聞法、7、具他心智、8、善具神足、9、無我我所、10、得不退轉、11、悉皆化生、12、無有女人、13、衆壽無量、14、無不善名、15、無臭香滿、16、三十二相、17、一生補處、18、供養諸佛、19、皆說佛藏、20、具那羅延力、21、不能知莊嚴、22、逮無礙辯、23、菩薩身由旬淨光現土、24、常修梵行、25、天敬根具、26、得受喜樂、27、積集善根、28、著壞色服、29、善分別定、30、隨欲莊嚴、31、至定見佛、32、如他化天、33、無山土海、34、無惱障聲、35、無苦難聲、36、樹下成道、37、光明無量、38、壽命無量、39、菩薩無數、無有二乘、40、諸佛稱揚、41、聞名往生、42、臨終現前、43、隨意聞法、44、聞名得忍、45、滅後得忍、46、聞名轉女、47、滅後轉女（計四十七願—1—36—35—47攝淨土願攝淨身願）

四　兩漢譯との主なる差異

一、そこなる一切衆生は生の念あり得ん（梵本第四願）

無識譯「人天無別皆得六通、以宿命通、乃至得知百千萬億那由他劫宿世之事」

秦　譯「願其中衆生、皆自識過去億那由他百千億宿命」

とあつて、「秦譯」は概ね梵本と對同するが「無識譯」は前願の「人天無別」の願と合して、說くところその詳細を得ている。

二、悉皆化生（梵本第十一願）と無有女人（梵本第十二願）は「秦譯」に於いて對同するが、「無識譯」はその順序錯對。

三、一々の菩薩身量百千由旬にして……（梵本第二十三願）

無識譯「一々菩薩所坐之樹枝葉遍滿一萬由旬」

秦　譯「願令一々菩提樹高千由旬……」

とあつて、漢譯二本共に菩提樹高とするが、これは攝法身願當初にも出づるから、梵本の菩薩身量に從う。

四、三昧の獲得にあつて諸佛に親近するを得、乃至菩提際にまで隨見せしめん（梵本第二十九願）

無識譯「乃至成阿耨多羅三藐三菩提、於此三昧無有退失」

秦　譯「乃至菩薩菩提際未嘗不見」

とあり、「無識譯」には、一見すると三昧に於いて退出なしと誤讀され易いが、このところ梵本及び「秦譯」に照合してみると三昧力の故に、諸佛隨見に退出することなしと讀まるべきである。

五　梵文當相よりする第二の課題への一部前提資料

如上、さきに私が提示した第一の課題について、若干のアルバイトを試みたのであるが、思想的に興味があり、且つ重要であると思われるものは、やはり第二の課題であらねばならない。これについての詳細は、この際紙數の制限上、報告し得ないが、たゞ茲で、その一部前提資料として眺めて置きたいことは、Sukhāvatīvyūha と Karuṇāpuṇḍarīka との關係について、主として後者の梵文願事の體裁から類推すると、どうも前者の願事が基調となつて、よく整理按配せられ、しかもそれに際してはそこに說かれる願事數にまで符合せしめんとした斯經頌者の意圖する若干の臭が窺われるように思われることである。その理由は「悲華經」が「壽經」願事中より缺除せる願事は、植諸德本、供具如意、諸佛納受、智辯無窮、華雨樂雲、觸光柔輭、受樂無染、生尊貴家、得三法忍の計九願事であるが

これに補するに、悉皆化生、無有女人、如他化天、無山土海、無惱障聾、無苦難聾、樹下成道、滅後得忍、滅後轉女の九願事を以てしたことである。ところで、この補足願の中で、いさゝか奇異に思われるのは、最終の「滅後得忍」と「滅後轉女」の二願事である。望月博士は、これは佛の在世の得益を滅後にまで均霑せしめ、「得三法忍」と「轉女成男」の二願意を一層擴大强調したものであると言われる。無論、思想內容的に言へば、まさしくそれに違いはないが、考えように依つては、別してこの二願のみを取り立てて滅後の得益にまで引き伸す必要もなく、敢て滅後の得益にまで願意擴大しようとすれば、なお重要な願事はまだ他にも相當見出し得られるのではなかろうか。

そこで、このあたりのところを上述梵文自體の當相から眺めてみると、在世、滅後の各二願事は、その內容に於いて殆んど一致するようであり、たゞ願事冠頭の "bodhiprāptasya ca me" が "parinirvṛtasya ca me" の詞に置き換えられているにすぎず、使用語及びその願意に於いてはなんの差異も見出し得られない。願文中に於いて、强いて差異を擧げるならば、在世の得益に於いては "gaṇanātikrāntesu kalpesu" の詞を揭げている程度にすぎない。なお、このところを梵文について仔細に調べてみると、最終の「轉女成男」の願であるが、在世得益願の "gaṇanātikrāntesu buddhakṣetresu" の個處が、滅後得益のそれに於いては "gaṇanātikrāntesu kalpesu gaṇanātikrāntā" となつて、"gaṇanātikrāntā" の詞が取り殘されているような感がする。この詞は頌者の意向では、次の "yo striyo" に掛けた形容句の如く思われるが、前願「得三法忍」の滅後得益に於いて "gaṇanātikrāntesu kalpesu (paçcād) gaṇanātikrāntesu buddhakṣetresu" とあるのを、その儘、寫しとらんとした際、"buddhakṣetresu" を不注意の故に脫落したか、或は特に「轉女成男」の願に於いては、在世の得益に "gaṇanātikrāntesu buddhakṣetresu" を、滅後の得益に "gaṇanātikrāntesu kalpesu" を各別に配合せんとして、後者に於いては "gaṇanātikrāntesu" を二度書き下して終うたので、これを "gaṇanātikrāntā" と、その場で女性、主格に語尾變化せしめ、次の "striyo" と同格ならしめようとした頌者のナイーブは或種の根跡が認め得られるからでもある。換言すれば、梵本一部の體裁から類推して見ると、斯經頌者が阿彌陀佛因願を頌するに當つて、Sukhāvatīvyūha 所說の因願を基調とし、しかもこれをより良く整理按配しつゝ、どうやら最後のところまで寫しとつて來たが、愈々終末に近づくと、梵文「壽經」の願事數に符合せず、些か物足りなさを感じた彼が、これを補う可く最終の二願「聞名得忍」と「聞名轉女」をして、在世と滅後の各二願宛に夫々分劃配當したものでなかろうかとの推定がなされるからである。

1　但し現存梵本は願文中に一應句切線が與えられているが、仔細に檢すると、それとても願意竝に文勢上から見て、妥當を缺いているむきも多分に見出し得られる。

2　漢譯二本については、「無識譯」に於いて、極めて曖昧であるが、「秦譯」はその說相、梵本とかなり對同するようであり、大體、(A) の場合は「願其中」「使其中」、(B) の場合は「使我」「令我」の如き標識が與えられている。

3　梵文訂正の一部（以下の序列願數は本稿の願事分劃に依る）。第一願 (a) yatra (C本、P本、K本共) とあるは tatra に

訂正。

(b) nirayāstūrṇa（C本）、nirayo syurna（K本）は nirayāḥ syur na とみる。

(c) chrāvayeyus（C本、P本、K本共）とあるは cyāvayeyus に訂正。

○第五願 (d) tisthanto, yāpayanto, deçayantaḥ（C本）はK本にあり tisthato, yāpayato, deçayataḥ (pl. acc) とする。

○第七願 (e) teṣāṁ ca *buddha* koṭiniyutaçatasahasra（C本）は yatteṣāṁ *bahukoṭi*niyutaçatasahasra（K本）に依る。

○第九願 (f) antataḥ（C本）、antagataḥ（K本）とあるは antaçaḥ に訂正。

○第十一願 (g) syunaḥ（P本）とあるは誤寫。

○第十五願 (h) bhagavan ghanena（C本）、bhagavadgamdhenata（P本）とあるは、ghandhena（K本）に從う。

○第二十三願 (i) samaṁ tena（C本）とあるは、samanaṁtena（K本）に從う。

○第二十九願 (j) bodhiparyantaṁ nānupaçyeyuḥ（C本）は bodhiparyantena anupaçyeyuḥ に訂正。

○第三十六願 (k) niṣaṇaçcāsamekamkṣaṇa（C本）とあるは、niṣaṇaçcāhaṁ ekamkṣaṇa（K本）に從ふ。

○第三十八願 (l) sarvajñena jñānena（C本）、sārvajana（P本）は、sarvajñānena と見る。

○第四十一願 (m) pariṇāyanaṁ（C本）は pariṇāmanaṁ（P本、K本）に從う。

○第四十四願 (n) bodhisattvānamadhyeyaṁ（C本）は、bodhisattvā mama nāmadheyaṁ に作る。

(o) テキストに缺くも、trityaṁca を挿入する。

○第四十七願 (p) gaṇanātikrāntā（C本）は gaṇanātikrāntesu buddhakṣetreṣu と補足訂正するか、若しくは削除する。

新刊紹介 8

野上俊靜「遼金の佛教」

遼代篇

遼朝と佛教　遼代に於ける佛教研究　『龍龕手鑑』雜考、遼代社會に於ける佛教　遼代燕京の佛教　遼代の邑會について　契丹人と佛教　「遼代佛教」に關する研究の發展

金代篇

金帝室と佛教　金李屏山攷　金の財政策と宗教々團　「二稅戶」攷　「金眞教」發生の一考察　宋人の見た金初の佛教　「金代の佛教」に關する研究について　胡族國家と佛教

索引

（A5　三五〇頁　平樂寺書店）